読書と思索

理事　寺地　武雄

全国読書世論調査結果が公表されていたが、われわれが日常生活で、マスメディアとの接触率は、テレビ97パーセント、新聞92パーセント、ラジオ52パーセントこれら三つのメディアに使う時間数は４時間25分で若干増えているが、読書率は数年来低迷を続け書籍、雑誌の総合読書率は71パーセントと微減にとどまっているものの書籍の読書率は男45パーセント、女42パーセントと著しく激減し、就中40才代では急降下しているのが実態である。学生諸君も本学でのアンケート調査の結果をみれば読書意欲の著しい減退は否定できない。

何故であろうか、これらの究明は改めての機会を得たいと思う。

読んでは考え、考えては読む。無心無欲に眺めると単に紙と印刷インクの塊に過ぎない書物も、その中に先哲の心の声を見出し生き生きと聞くことができるならば、それこそ読書の醍醐味であり大きな魅力としてわれわれの心を捉えるであろう。

徒然草の一節

　独り燈の下に書を広げて、見ぬ世の人を
　友とするこそ、こよのう慰むわざなれ。…

私は折にふれこの言葉を思いだすのであるが書物が読者に与えてくれる楽しみの極致がはっきりと語られている。

書物はまた生きものだとも云われている。そして、この生きものである書籍は、人間の生きる世界のなかに、私共の日常接する社会とは別ものの時間と空間の束縛を脱した一つの大きな社会を形造っている。そこで読者はプラトンと話をすることもできれば、白楽天や、老子の「語」を聞くこともできるのである。読書とは、この眼に見えないが確かに存在した主として故人から成りたっていることもあるがおそらく現実の人間の生きる社会よりずっと人間的な精神の社会に身をもって生きることなのである。物を読むという一見無駄な暇つぶしに似た行為が、私共の短い人生の貴重な時間を惜しみなく割くに価するのは主としてこのためである。

酒は始めて口にする者には、ただ辛いだけである。異性は、それを知らぬ若者には魅惑よりもむしろ強い恐怖の心を呼び起す。また芸ごとか、囲碁とか、将棋とか、スポーツやトランプのような遊戯にいたるまで、その面白味が本当に解るまでは、それぞれ或る程度の努力が必要な筈である。しかもこれらの遊戯が難かしければ難しいほど人々はそれに熱中するが、それは底の浅い楽しみにはすぐ飽きるのが人間の性だからである。読書の楽しみも、その難しさのなかから自然に湧きでてくるものである。われわれは読書によって思考を促され、また導かれるもので全く読書しない思想家というものは考えられない。

読書は本来受動的な行為で心を虚しくして著者の説を聴くということだろうが、単に受動的に受け容れるというに止まるならば、そこには何らの発展も進歩も起らない。著者の主張に対する反応として能動的な思索があってこそ新しい実を結ぶものである。受動の一面のみがあって能動の一面を欠くものは畢竟、物識りにすぎない。世の学窮といい、Pedantといわれるものは多くはそれである。

読書と読書の間に必ず読んだことについて考える習性を養うことが大切である。

幸いわれわれは香り高く、充実した図書館に恵まれ、香散見草も心温かく招いてくれている。忙中閑あり、図書館で静かに読み、かつ想い、かつ読むことを大学人の誇りとして新しい世代への架橋作業に自らを磨きたいと切に願う次第である。